

貧しさを求める

私は何十回と観ているその映画の結末を知らない。ビールを飲みながら、あるいはワインを飲みながら、できあいの惣菜やスナック菓子をつまみながら、ぼんやり眺めている。ふと気になる科白があると、巻き戻して字幕の言葉を書き留めてまたぼんやり眺めたりしている。そして途中で寝てしまう。次に観るときはまた忘れていたから最初から観始めて、はじめて聞く言葉のように聞き、またメモを書き留めて寝てしまう。

子供は崖の上のポニョが好きで毎日のようにつけてくれといい、テレビ放映のときに録画していたものを流すが、子供にもこだわりがあり、映画が始まる前の金曜ロードショーのオープニングのところから始めるように指示されたり、最初のトトロの横顔のところで始めるように指示されたりする。流し始めるとしかしすぐに飽きてしまうか眠くなり最後まで観終わるということがない。それでも好きで次の日にはまたポニョをつけてくれという。これがトトロになったりパウパトロールになったりSINGになったりするが、いずれにしても同様になかなか観終わるということがない。しかし観終わらないから好きではないということではなく、何度でも観る。ただ一度通して観た人と比べれば最後までストーリーはしらないし、途中で飽きてしまうというのにお前は本気で好きなのかと思われるかもしれない。本当に好きなことと全てをし

りたいということは違うのだから、好きなら全部しりたいだろうといわれるとわけがわからずきっと動揺してしまうだろう。子供なら何をいつてるのと思うだろう。全部観なくても好きなものは好きだ。

昔観た映画で、タイトルも内容も全く覚えていないが、映り込んだ光と草の緑がきれいでそれだけでもう好きだというのがある。評論家にいわせればお前は映画のみかたを何も知らないということになるだろう。4月から新しい職場にかわり、初めて電車で行く場所だから早めに着いてしまい、近くの神社で時間を潰していることがあった。小雨が降っていたが陽光も差し込み、地面から草のにおいと蒸気が立ち上り、木の枝にかかる蜘蛛の細い糸が光を受けるたび白い筋をみせた。ごく小さい羽虫もよくみると舞っているが写真にはうつりこまない。私は写真を残して模写しようかと考えいたが、写真にうつらない蜘蛛の糸や虫たちや蒸気や風や光やにおいに気づき描くことを諦めた。描くのであればいまここで描きたい。

ある映画のなかで、「この箇所には見えるものは描いてはいない。だが見えないものを描いているのでもない。見えないことを描く」というクロード・モネの言葉が引用されていた。見えないことを描くのは、見えるものと見えないもののあいだを描くことに等しいだろうか。それは見えないものを見るように描くこ

とではなく、見えないものを見えないままに描くことでもあるだろう。たまたまうつりこむもの、けっしてうつりこまないものがある、そのあいだに見えないことがあるだろう。

私の仕事も見えないことを描く仕事といってもよいかもしれない。みえない進路に道筋をつける旅先案内人という少し大仰だろうか。出航の時を告げ、別れ際をせめて後腐れないものにできるようにしつらえていく。私たちにできることは少ない。

本業ではないが、私は精神科の訪問診療にも携わっている。その関係で新聞や雑誌の記者の取材に関わることもある。といっても、私は取材を受ける人のそばでお酒を呑みながら、酒のつまみのひとつに取材を聞いているだけなのだが。訪問診療や訪問看護でも悪どい商売をしているところは絶えない。そうした事業を糾弾する記事もまた売れるのだろう。記者はメモをとるわけでもなく、録音機をテーブルに出すのでもなく、インタビューから話を聞きながら、そうなんですかそうなんですかと肯定するでも否定するでもなく職業柄定着したような相槌の打ち方をしていた。こういう取材のインタビューの目的は専門家からひとこと言質をとり記事の信憑性を高めることであり詳細な記録が不要であるケースかあわよくばインタビューから本音や裏情報を引き出すために許可なく録音しているかだろう。その取材の姿勢が板についている記者だった。

記事は予定調和で内省がなく他罰的で面白みがなかった。花は花として、動物は動物として、役割を与えられてしまったつまらない小説の見本より一段記事はつまらない。なぜ風景を描くのか。私はなぜその神社の風景を描きたかったのか。糸は消えるからだ。導きの糸は消える。消えるその糸を描くことが目的ではない。糸が消えることを描きたい。蜘蛛の糸は消える。痕跡は消える。痕跡を描くのではなく痕跡が消えることを描く。

連休に2日ばかり休みがとれて、帰省先の音楽博物館でテルミンの演奏を聴いた。テルミンは垂直と水平についてのアンテナに手をかざすことで音量と高低をかえて演奏する電子楽器といおうか。電波は見えない。見えないものと距離をとり音をつくる。しかし電波はみえないが、みえないコトよりわかりにくいことはない。しかし独特な蠱惑の音色である。子供を抱き抱えたり展示物に触れないよう制止したりしながら、また会場は蒸し暑く汗をだらだらかきながら鑑賞していたのでじっと集中してきくということもできなかつた。生活の中に音はあり、だから音楽は楽器がなくても奏でることができる。それでも楽器という特別な器を人は作ってきた。聴く構えも様々である。器はなんであってもいい。しかしテルミンはいい。

映画のなかで女性がこう言う。「私は言葉づかいに、貧しさを求める」。またこうも言う。「言葉など聞きたくない」。言葉というのは愛の言葉のことでもある

が、それだけではないだろう。私は貧しさを求める。(2024.5.8)